

その街は、眼前に川の様な海を臨んでいた。

人の流れについて行ったら、山も無いのに奇妙なトンネルに入ってしまった。

どうやら、商店街らしい。屋根のある商店街を、私は初めて見た。

「あー、見かけない顔だね」

物珍しさに、入口付近でキョロキョロしてたら、声を掛けられた。

声は、一軒の、ガラスケースに陶器がたくさん並んである店の奥から聞こえた。

「どうぞ、入ってきなよ。怒られないからさ」

声につられて、店の中に入る。中は、陶器やら碗やら小物やらが所狭しと並べられて

いる。私は、ははあ、と思った。

ここは、茶道具を売る店らしい。

店の奥に添えつけてあるソファの上。そこに一匹の猫が居た。

「僕はチャミ。君は？」

「しがない旅猫」

私が言うと、チャミは尻を揺らして笑った。

「熱いお茶でも、飲んでいくかい？」

言いながら、ゆっくりと立ち上がる。自分で茶を淹れるつもりだろうか。

「いや。遠慮しておくよ」

私はかぶりを振った。

「今日中にもう少し、この辺りをふらつきたい」

店を出ようとしていた私の背に、「あー、言い忘れてたよ」とチャミの言葉が当たった。

「旅猫さん。ようこそ尾道へ」

おのみち。

川の様な海がある街。

潮の香る街。

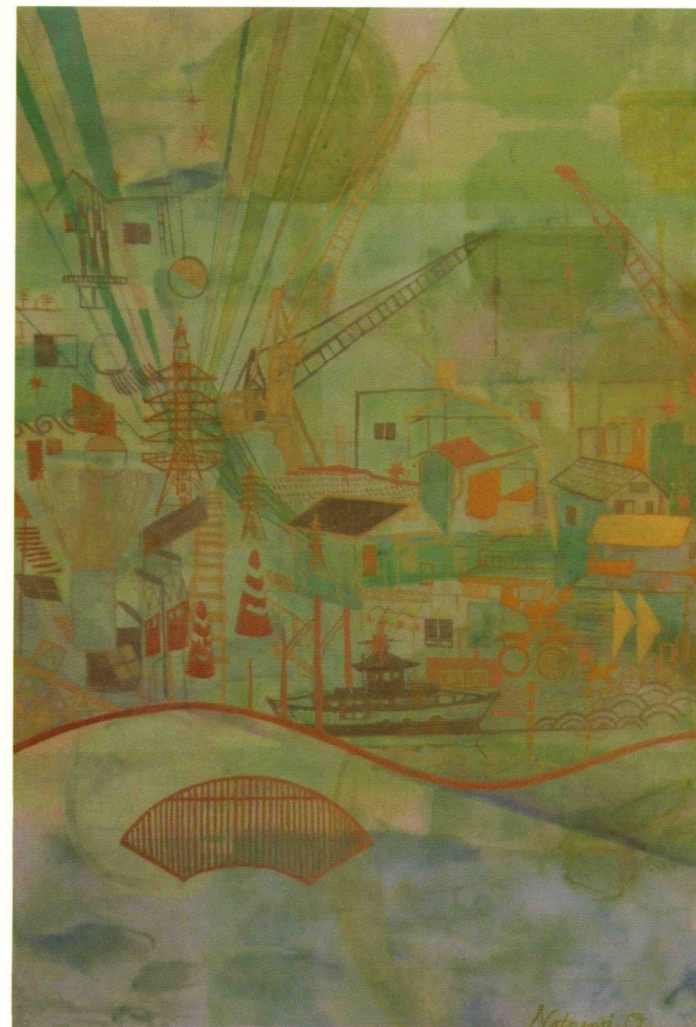
私は店を出て振り返った。

「こっちも言い忘れてたが。私は別に茶が嫌いなわけじゃない」

そして、茶をたしなむ猫が居る街でもあるらしい。

「私は猫舌なんだ」

奥から、チャミの笑い声が聞こえた。



藤原茶舗 岡本奈都美/絵